

キリマンジャロ登頂(アフリカ最高峰)

1989年12月23日から1月2日 11日間

西遊旅行社ツアー

参加者 十二名

十二月二十三日(土)

晴

十六時二十分、パキスタン航空 ジャンボ ジェット機 PK740
便で成田空港を出発。マニラ、バンコク経由カラチ空港
着、PK740便に乗り換え出発した。

窓から下を覗くと、ルブアリハ砂漠がどこまでも続いていた。
アブダビからは、アフリカ大陸の広大な原野が続き広さにはあがらぬ
て驚嘆した。ケニヤのナイロビ空港に、二十四日(日)十五時五十
分に着いた。約二十時間の長旅である。

十二月二十五日(月)

晴

朝、ナイロビ市内のホテルをワゴン車二台で国境の町ナマン
カに向かった。車がホンコツで、何処まで続く。本道の道路も悪くか
タガタゆれて落ち着かない。おまけに130KM位のスピードではず。

道の両側は、自然公園になっていて広い草原がどこまでも続い
ている。キリン、駝鳥などの姿を見ることができた。

ケニヤからの出国、タンザニヤ入国の手続きを済ましキリマンジャロの
登山基地、キボホテルに着いた。

十二月二十六日(火)

晴後雨

朝、ガイド、ポーターと打ち合わせの後、ワゴン車二台で登山
事務所のあるマランゲゲートに着く。ここで登山履、登山料も払
うらしいを終り登山を開始する。

荷物は、ポーターが二人分約20kgを麻袋に入れ頭の上に載せ
軽々と登っている。始め自動車の通れるくらいの道を登る。

道の両側は樹林帯で熱帯の高木が生い繁けられている。珍しい草花も目を楽しませてくれる。小鳥の囀る声もさかんに聞こえるがなかなか姿を見せない。珍しい高山蝶も見かけた。

欧米各国からの登山者が多い。下山する人とすれ違う現地人は、明るくジャンボ(今日は) ジャバン ガンバレなど世界各国の言葉が聞かれた。日本人も多く今回三、四のツアーの団体に会った。

単独で下山する日本人の話では、高山病と天候も悪くキルマンポインツに登れなかったそうが。

やがて赤土のせまい登山道に変わり、しばらく登ると草原に出た。今まで晴れていた空が急に曇り出し、遠くで雷が鳴ったかとおもうと急に雨になり大粒の雨になり本降りになった。登山道はあっという間に泥水の川になった。傘をさしても下半身泥水でぐしょぬれになる。私は樹木の下で雨宿りをす。十分位で小降りになり出発した。林の中をしばらく登ると芝布の中に三角屋根の山小屋が八、九棟現れた。

ここが今晚泊まる山小屋だ。マラングハット 2690Mである。四時間で着いた。一番大きい建物の二階の二段のベットの上下を確保する。五時頃からうちに下の食堂で夕食を食べる。スープ、パン、バター野菜の煮つけ、肉のバター焼き、デザートだった。食後は早めに就寝した。

十二月二十七日 (水)

曇後雨後曇

朝食後、パン、バター、オレンジ、小さい桃二個の弁当を受け取り出発した。始め泥の急斜面の登山道を三十分位登ると樹林帯が無くなり廣々草原帯に変わり視界が開けてきた。

はるか前方に、キルマンジャロが見えてきた。残念だが頂上は雪にかくれていた。右側が山肌になっていて、山腹の緩い登りの登山道を進む。いくつかの谷を越えて登った。途中日本の山で見かけるマムシ草に似た花が咲いていた。その他多くの熱帯の高山植物が珍しかった。途中雨が降りおしげがすく小降りになり止んでしまった。二、三日休憩に登っているうちに、三角屋根のある山小屋は

着いた。ここが、マンダラハット 3750M 富士山と同じ高さだ。

十二月二十八日 (木)

曇後霧

始め、二十度位の斜面をしばらく登る。水分の多い湿気を水たまりをよけて歩く。二時間位登ると最後の水場があった。

飲んでみると、なま温かく日本の山の水のようにおいしくはなかった。ポーターは、大きなポリタンクに水を入れてここから運んでいた。

休憩して、弁当の一部を食べる。ポーターの持っている荷物を頭の上に載せてみる。とても重くて歩けたものではない。外人も面白がって頭上に載せ写真を撮って喜んでいた。

いくつかの山を登り降りすると砂礫が何処までも続く広大な緩斜面であった。ここが山溪などの写真で見た場所だった。

車は全壊まいていなかった。見えるはずのキリマンジャロは曇ってガスがかかっているかかった。そのうちは霧が降り出し急に気温が低くなった。あわてオーバーホンを着て手袋を着ける。長い長いカレ場を歩いているうちに一面真っ白になる。しばらく登ると右前方に山小屋が見えきた。

近いと思っていたのに、そこから二時間かかると言う。最後中程が近くなり斜面が急になり呼吸が苦しくなる。がんばって最後の山小屋に着いた。

六時間で登った。ここがキボハット 4740Mだった。

痛れもあり、明日の登頂のことを考えベットの土にシラフを出して休養した。何時の間にか頭痛が始まり、胃腸もあかむかした。

十六時頃、日本から持ってきたうどん、味噌汁を夕食にした。食欲が無いかで味噌汁がけどうにも飲んだ。これが高山病だと考之明日の登頂が心配になった。

添乗員が心配に酸素を吸わせてくれた。十分位で気がついたら少しは活ったがしばらくすると頭痛が始まり眠れないまま時間が過ぎた。

十二月二十九日 (木)

晴

眠れないで高山病で苦しんでいるうちに出発の一時がせまってきた。同行のみんなは、ヘッドランプをつけてゴソゴソ出発準備を始めた。私は、「部屋で待っています。」とカ無く添乗員に言って登頂をあきらめた。「登っているうちに治る人も居るのでお登れみよ。」と、はげまされた。あわてて出発準備をして登山の列の最後に加わった。ガイドは、ところどころカンテラを持って列に入っている。ヘッドランプを着けていても暗くて登山道がよく見えなくて苦勞する。体調が悪くどんどん列がう離れてしまった。

最後に、同行の女の人とガイドの三人になってしまった。少しづつがんばって登っているうちに、女の人が座りこんで苦しうに吐きだしてしまった。しばらく休んで登頂を続ける。ヘッドランプの電池がきれてしまったので二人分交換する。登山者の列は、峰の上の方で灯が点々と小さくなってきた。女の方は、少しづつ遅れて登らないで休んでいた。

ここまで来たう登る以外にないと考え少し登っては、ハアハア呼吸を整えかねばなる。たんに急斜面なり登山道は電光石火に斜登行になつてきた。ますます息苦しくなってくる。十メートル位登り度にはハアハア言いつがる休む。八号目位まで登った時私の登山道をヘッドランプで照らしてくれている人が居た。その人に追いつこうと必死で奮闘した。

やがて、東の空が明るくなってきた。どうにか御来光を写真におさめる。はやく前の人に追いつこうとあわてて太陽が顔を出したところは空せかかった。はやく追いついてみると添乗員の柳田さんやガイドの不思議に頭痛も少なくなり元気がおて岩場の道を三回回斜登行を続けようやくギルマンポイント5695Mの二番目の火口壁の頂上に着いた。大きな岩の上にポールが一本立っていた。

同行の栗原さん夫婦と他の登山者四人で記念写真を撮り休憩した。火口壁の向こうには、氷河が有りウルフヒーク5985Mの方は雪で真白な火口壁が続いていた。

降りには、体調もよくなり富士山の須走りのように、まっすくすべって

砂礫を降り、二時間でキノハットに着いた。少し休憩してキノハットに下山した。

十二月三十日 (土)

晴

登山基地、マラング・ゲートまで下山した。登る時パラグライダーを持った日本人二人の青年に会った。「内緒だよ」と言っていたので兵隊に会ったらしい。同行の人の話では、銃砲を持った警備員が罰金 2000 ドルとされたそうだった。

車でキノホテルに着き荷物をまとめた。世話になったカクトに、記念のヘッドランプ、帽子をあげ、必要のない物をあげた。別車をつけ車でアユーシヤのホテルに着いた。

十二月三十一日 (日)

晴

ワゴン車で国境を通りナイロビ空港からカラチに向かった。

一月一日 (月)

晴

カラチ発の航空が11時45分なので、エアポートホテルで一級服し、カニ釣り、バザール、博物館を見学した。

一月二日 (火)

晴

十二時二十分、無事成田空港着

コースタイム

12/26. (火)	キボホテル 9:00	マランゲート 9:20	→	マンダラハット 10:00	
12/27. (水)	マンダラハット 7:40		→	ホロンホハット 10:00	
12/28. (木)	ホロンホハット 7:30		→	キボハット 10:00	
12/29. (金)	キボハット 1:00		→	ギルマンポイント 7:00	
12/30. (土)	マンダラハット 10:00	→	マランゲート 12:00	→	キボホテル 12:30

